

# 「保幼小連携を成功させる原動力」についての一考察

－現場の校長・園長の視点を中心として－

正 司 顯 好・前 徳 明 子

## A Nursery, a Kindergarten, the 1 Consideration about the Driving Force in which Elementary School Cooperation is made Successful

— Focusing on the Perspective of the Principal Director —

*SHOSU Akiyoshi and MAETOKU Akiko*

キーワード：保幼小連携、保育所保育指針、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領

### 1 はじめに

近年、「保幼小連携の取り組みが積極的に行われている」というような現場の声をよく耳にするようになった。

「幼稚園と小学校の連携・接続をめぐる歴史的考察」湯川嘉津美<sup>1)</sup>（上智大学）によれば、「幼稚園と小学校の連携ないし円滑な接続をどのように図っていくか、という問題は古くて新しい問題である。幼児教育の歴史を振り返れば、それは幼稚園の創設期から常に課題とされ、解決に向けた議論や努力が積み重ねられてきた問題であり、今日なお課題として残されているものであることがわかる。」これまでの歴史の中でも同じように話し合われ、進められているのであるが、社会の変化と共に常に新たな問題が課題となり、試行錯誤している現状がある。問題が大きくなると解決しようと修正し、少しよくなると、また、意識が遠ざかり、また、問題が起こるというようなサイクルが繰り返されているのではないだろうか。それは幼小連携の問題を全体として捉えるのではなく、部分的な修正をしてきているにすぎないのかもしれない。

幼小連携の動きについて 1989 年、幼稚園教育

要領が 6 領域から 5 領域になり、学習指導要領に生活科が新設されたこともあり、クローズアップされてきた。

2007 年 1 月の日本保育学会会報 No.137 では、児嶋<sup>2)</sup>が「保幼・小の連携は一部では、取り組みが始まっているものの全国的に見れば遅れている。（中略）保幼小の連携に関心はあるものの、実際には小学校の教員を交えた話し合いの経験は行政主導のものを除けばほとんどない。この種のものは、短期で終わり、継続されることが少ない。」とし、その原因については、「双方に子どもの発達に対して、『連携したいという意識が弱いこと、継続して交流を深めるほどの日常的な関係がないこと、時間の調整が難しい』などの理由から義務的になりやすいからなど」と述べている。その後、幼稚園教育要領、保育所保育指針の改定において、小学校との連携の趣旨が盛り込まれ、小学校の学習指導要領でも幼児教育との連携が強化されている。

文部科学省による平成 22 年の調査（幼児教育実態調査）<sup>3)</sup>によれば、公立・私立幼稚園の中で、保育所の幼児や小学校の児童と交流している園は、77.2%であった。また、保育士と教師、教師同士が交流している幼稚園は、75.2%、教育過程の編成について、小学校と連携している幼稚園は、34.0%で、2 年前と比べると、2 倍以上増えている。2012 年、日本保育学会「保育学研究」<sup>4)</sup>の中

でも、岩立が「幼保小連携は着実に広がってきている」と述べているものの、その取り組みの内容や期間については、それぞれに差がみられているのが現状だ。

この論文では、幼保小連携の取り組みについて実際の現場でどれほどの差があるのか掌握しながら、スムーズな連携を成功させるために必要な要因を探ることを目的とした。

## 2 調査の概要

### (1) 調査目的

保幼小の連携教育を推進していくなかで、スムーズな連携を成功させるために必要な原動力となるものについて明らかにすることを目的とした。

### (2) 調査対象

埼玉県および隣接地にある社会福祉法人の保育園、学校法人、公立の幼稚園、公立小学校に勤務している管理職の方および先生方を対象とした。

### (3) 調査方法

現場（勤務先）へ出向いて、または本学へ来校してのインタビュー形式によるエスノグラフィー。

### (4) 調査時期

平成24年7月30日（月）～9月21日（金）の間に実施した。

### (5) 調査上の配慮

本調査の実施においては、個人情報保護のため所属名・氏名は匿名になっている。

### (6) 調査内容

- 1) 保幼小連携の必要性を感じますか。
- 2) その理由を教えてください。
- 3) 保幼小連携について、実際に取り組まれていますか。
- 4) 具体的な取り組みの内容について教えてください。
- 5) 保幼小連携において、よいと感じることは、何ですか。
- 6) 保幼小連携において、大変だと思うことは、何ですか。
- 7) 保幼小連携については、いつ、どこで、誰

が決めているのですか。

- 8) 保幼小連携を今後発展させるために必要な条件は、何ですか。

## 3 調査の結果

### 《インタビュー（I）》

#### <日時>

平成24年7月30日（月）17:00～19:00

#### <場所>

本学 会議室

#### <テーマ>

「保幼小連携を成功させる原動力」について

#### <話し手>

私立保育園 保育士 Aさん（男性 28歳）

公立小学校 教諭 Bさん（女性 56歳）

AさんとBさんは親子で、毎日夜、自宅で仕事に関する情報交換の時間を共有している。勤務地は30Km以上離れている。

#### <聞き手> 筆者（正司）

#### <記録> 筆者（前徳）

\* 個人情報保護のため所属名、氏名は、匿名になっている。（以下のインタビューについても同じ）

\* アンダーラインは、キーセンテンス（以下のインタビューについても同じ）

聞き手） 保幼小連携の必要性を感じますか。

保育士A） 私は、社会福祉法人が設置した保育園に勤務していますが、保育士の立場から必要だと思います。

教諭B） 私は、公立小学校に勤務しており、過去に1年生の担任を5回経験しましたが、小学校教諭の立場から必要だと思います。

聞き手） その理由を教えてください。

保育士A） 保育所では0歳児から保育する場合も増えてきているので、発育発達の段階がよく理解できます。発達が遅れている子、家庭に問題がある子等については、

事前に知ってもらう必要があると考えます。できるだけ小学校1年生の担任予定の先生と早めに連携をとっていくことで、こころとからだの引き継ぎができると考えます。

教諭B) 小学校1年生の担任経験という立場から考えると、小学校1年生を担任する教諭は、入学と同時に教育を1から始めようとする傾向が強いのです。2年生は、2年目の教育の積み重ねというように考えがちです。ところが、実際は、就学前の教育があり、子どもが誕生した瞬間から教育・保育は始まっているのです。その部分を見落としがちになるのは、幼児教育の現状が理解できていないからです。そういう意味でも連携は必要です。

聞き手) 保幼小連携について、実際に取り組まれていますか。

保育士A) 取り組んでいます。

教諭B) 取り組んでいます。

聞き手) 具体的な取り組みの内容について教えてください。

保育士A) 保育所側から小学校に申し出て、年間カリキュラムを見せていただいたり、小学校を訪問し一緒に授業に参加したり、図書館で本を読ませてもらったりしました。

教諭B) 南部地区は、あまり活動していないが、活動している所では、幼稚園児が小学校で給食を一緒に食べたり、公開授業に参加したり、ゲームを一緒に行なったりしているとのことです。

聞き手) 保幼小連携において、よいと感じることは、何ですか。

保育士A) 園児が小学校との授業風景をみて、小学校への憧れや期待をもったりできる。そうなることで、小学校への不安がなくなったりする。

教諭B) 事前に子どもの様子を教えてもらえることは、迎える側の準備ができるという

点で助かります。その際に小学校側から子ども達が生活の自立をしっかりとできるようにしてきてほしいと要望することがあります。具体的には、着替えが自分でできる、歯ブラシができる、排泄ができる、自分の荷物が自分で片付けられるなどで、すべてが学力にも影響します。入学後は、友達を誘えないなどのコミュニケーションをとれない子どももいるため、言葉の指導をしたり、週に1、2回くらい若い先生が休み時間に「はないちもんめ」をしたりして関わっています。

小学校としては、毎年2月に学校説明会を行い、入学前に保護者に小学校での学校生活について説明をしています。

聞き手) 保幼小連携において、大変だと思うことは、何ですか。

保育士A) 連携が重要だいいながら、お互いの教育・保育内容が理解できていないということが問題だと考えます。

小学校の学習指導要領やカリキュラム・学習内容・課外活動などについて私は、母が小学校教諭をしているため、理解していますが、ほとんどの幼稚園教諭、保育所の先生方は、わからないと思います。小学校の先生方との研修会も今のところありませんし、今後の課題の1つだと思います。保育所の先生方が小学校のカリキュラムや学習内容を知ること、小学校側から保育所に求められる内容がみえてくると思います。また、小学校の先生方にも、幼児の発達や保育カリキュラム（年間カリキュラム）を知っていただき、一年間に子どもが獲得すべき内容を理解していただくことで、就学前の子どもの姿を知ることにつながるのではないかと考えます。

教諭B) 小学校側からみても保育所、幼稚園の教育・保育内容がどこまで理解できているか疑問に思うことがあります。例

えば、小学校に入学すればその日から児童は教育という場所で教科書を使って授業というものを受け「学習」中心の生活をしなければなりません。しかし、就学前の教育・保育内容は教科書を使わず、「遊び」を中心とした自由な空間での生活をしているわけです。「ぼくは、かくれんぼがしたい」「わたしは、お絵かきしたい」と言って自分たちの遊びたい場所に向かいます。保育室から子どもがいなくなってしまう。小学校では、まず考えられないことです。授業中、教室に一人でも児童がいなければ大変なことになります。そういった大きな違いがあることが先生方のなかでも体験的に理解できている方は、ほとんどいません。教科書を使わず自分が創った指導案で教育・保育することが、いかに大変なことであるか。そこには、「遊び」の中から「学び」をみつける大切さがあるのです。

聞き手) 保幼小連携については、いつ、どこで、誰が決めているのですか。

保育士A) 連携については、園長が決めます。いつ、どこで決まるかについては、ほとんどの先生方はわからないと思います。

教諭B) 校長が決めます。小学校へ入学してくる幼稚園・保育園の園長・所長と相談の上、決めるのだと思います。

聞き手) 保幼小連携を今後発展させるために必要な条件は、何ですか。

保育士A) 連携を発展させるためには、どうしても管理職の理解が必要になります。例えば、その年度に年長の担任をしていた先生が次年度、教員研修として小学校に入り、子どもたちが学校生活にうまく適応できるようにフォローしていくことができれば小1プロブレムという問題もかなり解決の方向にむかうのではないでしょう。

教諭B) 新1年生のなかには、なかなか小学校

の新しい環境に馴染めず、しばらくお母さんと登校してくる児童や座って相手の話を聞いてられない児童もいます。入学後2ヶ月ぐらいで慣れてきますが、問題傾向のある児童はクラスに一人ずつくらいの割合でいるようです。他の学校では、問題行動を起こす児童がクラスで4人以上いる場合は、1年生問題対応教員がつき、一人ひとりの対応を行なっているようです。副担任制を導入している小学校もあるようです。

聞き手) 以上で終了します。長い時間、ありがとうございました。

## 《インタビュー（Ⅱ）》

<日時>

平成24年8月17日（金）14:00～16:00

<場所>

私立幼稚園 理事長室

<テーマ>

「保幼小連携を成功させる原動力」について

<話し手>

公立小学校・公立幼稚園（併設）

私立幼稚園（私立保育園併設） 理事長 兼  
園長 Cさん（男性 62歳）

公立小学校 校長 Dさん（男性 59歳）

<聞き手> 筆者（正司）

<記録> 筆者（前徳）

園長Cさんの幼稚園の半数以上の園児が、校長Dさんの小学校へ入学する学区内の関係である。

聞き手) 保幼小連携の必要性を感じますか。

園長C) 保育園も併設していますが、小学校へ園児を送り出す立場として連携の必要性を強く感じる。

校長D) 小学校として園児を各園から受け入れる立場として連携の必要性を強く感じる。

聞き手) その理由を教えてください。

園長C) 保育園・幼稚園から大学・大学院まで



の教育はつながっているのだから連携は必要なのではないかと考えている。特に人間教育の基礎である幼児教育の時の連携は大切である。

誤解をしていただきたくないのだが、以前、卒園生が遊びにきたら「小学校の先生は、話を聞いてくれない」と言っており、保護者も小学校の先生とは話づらいということだった。自分をもっと受けとめてほしいらしく、小1では、まだまだ先生にかかわってほしいらしい。

校長D) 小学校側も中学校へ送り出す身なので、気持ちがよくわかるし、同じようなことを心配している。もっと細かくみてほしいと思っていることがよくわかったが、なかなかそこまで手厚くかかわれないのが現実である。もっと少人数制だと違うのだが現在一クラスは40人になっている。

保育園・幼稚園と小学校では、かなり違った教育をしている。小学校は「学習」中心の教科指導で45分間座って学んでいるため、保育園・幼稚園の「遊び」を中心とした教育とは、環境ががらっと変わるため、「小1プロブレム」という問題につながっていくのではないかと思う。小学校から中学校に行く時には、「中1ギャップ」という言葉がある。

最近、トイレを使った後、流さない子が増えているとの報告があった。幼稚園では、自動トイレがあるため、環境の変化から起きていることがわかってきた。

聞き手) 保幼小連携について、実際に取り組まれていますか。

園長C) 取り組んできたが、さらに積極的な取り組みが必要と考える。

校長D) 同感です。

聞き手) 具体的な取り組みの内容について教えてください。

園長C) 年長のクラスの中で障がいをもってい

たり、気になる問題行動をしてしまう子は、10月～12月くらいの時期に小学校側から担当教諭の方に来園していただき、毎年2名の方にお越しいただき、実際園児の活動を1時間以上参観していただきます。その折、保護者も来園していただきいておりますので、最後にその子の家庭生活の様子について三者（幼稚園・小学校・保護者）で打ち合わせをします。

校長D) 学区内での公立の小・中・高の連携への取り組みは、始まっている。年間で、授業公開、研究部会などを行ない、地域の子どもの学力向上が目的となっている。最近、幼稚園にもお声かけし、新たな連携がはじまろうとしている。

聞き手) 保幼小連携において、よいと感じることは、何ですか。

園長C) 食育に関して、そばアレルギーやピーナッツアレルギーの子どもがいる場合は、小学校へも細かく報告し、喜ばれている。また、年間行事で運動会や発表会などで小学校の校長先生をご招待したり、逆に小学校の運動会等に参列させていただいている。

校長D) 給食指導をはじめ、障がいの内容、気になる行動を起こす子の家庭環境等、保幼小連携により入学前に教員間で交流できることは、入学後の学校生活を円滑なものにするために効果を発揮している。

聞き手) 保幼小連携において、大変だと思うことは、何ですか。

園長C) 幼稚園では「人に迷惑をかけない」ということを子どもたちに教えている。幼児期に完成をめざすのではなく、目標に向かって意欲を育て、失敗しても何度でも繰り返し繰り返し努力する姿勢を育てていく。それは、「遊び」の中から総合的な生きる力を育てる手法であるが、小学校に入学すると系統的な学習内容を授

業の中で学ぶことになる。なめらかな連携を試みたいのに、小学一年生になったら赤ちゃん扱いになる。しかし求められることは、テストで何点をとれるかというハードルが設けられ、すぐに結果を出せない子どもも出てくる。その辺の送り出す側と迎える側の連携がもっと必要であり、要録の扱いや情報交換の時期の見直し等も必要である。

校長D) 昔は、放課後に小学校の先生は子どもと一緒に遊べた。今は、放課後、研修・会議・不審者対応・集団下校の指導等でほとんど子どもと遊ぶ時間がとれない。下校時間が少し変わると保護者から、すぐに連絡が入る。どうしても子どもたちを残さなければならない事情がある時は、昼休みまでに決めてメール配信する。今は、緊急連絡網がなくなっているので、メール配信も大変。3、11の地震の時には、なかなか届かなかったので大混乱になった。休み時間も宿題をみたり、提出物の確認、採点や連絡帳をみていたりして、ほとんど子どもにかかわれない。子どもとの関係を構築していく時間が少なくなっているのが現実である。

聞き手) 保幼小連携については、いつ、どこで、誰が決めているのですか。

校長D) 年度初めに校長会で話題にはなるが、基本的には、子どもを送り出す側の幼稚園・保育園の園長と受け入れ側の小学校の校長との間で連携内容について決められる。

園長C) その通りです。

聞き手) 保幼小連携を今後発展させるために必要な条件は、何ですか。

校長D) 幼保と小の学びの一貫性・連続性、接続期における指導内容や教育課程の位置づけ等について連携を深めていかなければならない。しかし、幼保小教職員の合同研修会などの時間のすりあわせが難し

いため、校長や園長が各学校、園の行事に参列するのが、精一杯というのが現状である。県内のK市では、市立のほとんどの小学校と幼稚園が隣接しており、人事面でも校長が園長を兼務していると聞いている。保幼小連携について県内でもトップレベルの成果をあげている地域であると考えられる。

園長C) 私もK市の保幼小連携の積極的な取り組みは有名で子ども間交流を充実させることで、子ども同士が顔見知りになったり、幼児の入学時の不安解消につながっていると聞いている。私の地域のほとんどの幼、保は私立であるので、私立独自の教育観・保育観によって運営されている。幼・保の連携は、まだまだ今後の課題である。また、幼小連携については、私立幼稚園園長の考え方と公立小学校校長の考え方が一致していかなければ連携を推進させることはできないと考える。

聞き手) 以上で終了します。長い時間、ありがとうございました。

### 《インタビュー（Ⅲ）》

<日時>

平成24年9月21日（金）13：00～16：00

<場所>

公立小学校 校長室（隣設：公立幼稚園）

<テーマ>

「保幼小連携を成功させる原動力」について

<話し手>

公立小学校・公立幼稚園（併設）

校長 兼 園長 Eさん（男性 56歳）

<聞き手> 筆者（正司）

<記録> 筆者（前徳）

聞き手) 保幼小連携の必要性を感じますか。

校長E) 本校は、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方」について県教育委員会から委託を受けた研究校であるの

で当然、連携の必要性を感じます。

聞き手) その理由を教えてください。

校長E) 今、述べた研究指定校であるという理由とさらに本市の教育機関の特色として、ほとんどの市立の小学校と幼稚園が同一敷地内に併設されており、人事面でも、小学校の校長が幼稚園の園長を兼務しています。また、ほとんどの小学校の教頭は、幼稚園の副園長を兼務しています。小学校と幼稚園の距離は、徒歩で2、3分ですので非常に連携がとりやすい環境であるといえます。

聞き手) 保幼小連携について、実際に取り組まれていますか。

校長E) 県の教育委員会及び市の教育委員会・市の教育研究会の委託を受け、「学びや育ちをつなげる保幼小の連携」の研究に取り組んできました。

聞き手) 具体的な取り組みの内容について教えてください。

校長E) 幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続をはかるために、接続期の設定をしました。

①就学前の1月～3月を接続前期、②小学入学後の4月～5月を接続中期、③6月～7月を接続後期と3分割しました。

①は幼児期「5歳児・3学期」における教育要領等に基づく教育で「遊び」を通して行う総合的な指導になります。「表現」「言葉」「環境」「人間関係」「健康」の5領域を取り入れたアプローチカリキュラムが整備されました。②と③は、児童期（1年生・1学期）における学習指導要領に基づく教育で教科等の学習を中心とした指導になります。「国語」「算数」「社会」「理科」「生活」「音楽」「図工」「体育」「総合的な学習の時間」等を取り入れたスタートカリキュラムが整備されました。アプローチカリキュラムは、「3つの自立」を育むための設定で、

「学びの自立・生活上の自立・精神的な自立」がねらいです。スタートカリキュラムは、「3つの学力」を育むための設定で、「基礎的な知識・技能・課題解決のために必要な思考力、表現力・主体的に学習に取り組む態度」がねらいです。

聞き手) 保幼小連携において、よいと感じることは、何ですか。

校長E) 交流授業を企画・立案することで、人とかかわる力を育てることができる。企画・立案は、幼稚園側から提案されたり、小学校側から提案されたり様々だが、私自身が校長・園長として企画・立案することもある。運営まで至った交流授業を紹介したい。

交流授業＜テーマ「なわとび」学級活動（小学4年生）と人間関係・健康（幼稚園の年長）＞

幼稚園の保育内容が、人間関係・健康「なわとび」の時期であったので、児童（4年生）と園児が一緒になわとびを通して楽しむ計画を立てた。小学校側が園児を招待し、体育館でなわとびと一緒に跳んだり、なわとびをつないで、電車ごっこをしたりしてふれあうことにした。児童が園児を思いやる気持ちや人とかかわる力の大切さに気づき、深めることができるよう計画した。

成果は、児童は、園児を思いやる気持ちや人とかかわる力の大切さに気づき、よりよい人間関係を深めることができた。電車ごっこの活動では、計画にはなかったトンネルを作ったり、駅員役をしたりして場を盛り上げ、主体的に考えて行動することができた。園児は、4年生とふれあいながら、なわとびの跳び方が上手になって喜んで活動できた。小学校の教諭は、園児に対し、4年生とのかかわりに戸惑っている園児がいたら「4年生が教えてくれるよ。」「一緒にやると楽

しいよ。」などと声をかけ、活動のきっかけになるよう支援した。また、がんばってなわとびを跳んでいる園児をほめたりした。さらに、自分の思いをはっきり伝えていたり、4年生と楽しく活動している園児に「楽しくていいね。」「4年生と仲良しだね。」と声をかけ、園児の思いに共感した。逆に、幼稚園教諭は児童に対し、園児とのかかわりに戸惑っている4年生がいたら「幼稚園の子にやさしい声をかけてみたら。」などと声をかけ支援した。また、「優しく教えてもらったから、跳べるようになったね。」と園児が喜びを感じている様子を伝えた。さらに、「今の関わり方よかったね。」とよいかかわり方をしている児童を賞賛したりした。

聞き手) 保幼小連携において、大変だと思うことは、何ですか。

校長E) 連携するために打ち合わせ会議を設定することがかなり難しいです。小学校と幼稚園では、時間帯が違う上、子ども達から目が離せないのも、それぞれがかなりハードな勤務状態になっています。ですから、交流授業一つ考えても、幼・小の現場の先生方が一ヶ所に集まって打ち合わせをする時間というのが本校のように幼稚園と隣接していてもなかなかとれません。よって、それぞれの現場で企画・立案されたものを、校長・園長である私があずかって、教頭・副園長と相談しながら、企画内容を検討しています。

聞き手) 保幼小連携については、いつ、どこで、誰が決めているのですか。

校長E) 年度頭初に市の教育委員会から小学校の校長会で保幼小連携の必要性についての伝達はあります。具体的な年間計画は、それぞれの小学校に一任されており、校長が教頭と相談しながら決定します。それだけでは十分ではありません

ので、必要に応じて、入学してくる幼稚園、保育園の各園長とも連絡を取り合って連携のための具体的計画を立案していきます。

聞き手) 保幼小連携を今後発展させるために必要な条件は、何ですか。

校長E) 小学校の校長、幼稚園の園長の連携に対する理解の深さと決断力だと考えます。本校のように幼稚園が隣接していて、校長が園長を兼務していても、トップが相当情報を収集して決断していかなければ連携を推進していくことはできません。まして、別組織で学校運営している小学校と幼稚園であれば、さらにトップ同士の連携に対する理解の深さと決断力が要求されてくるはずですよ。

聞き手) 以上で終了します。長い時間、ありがとうございました。

## 4 考察

調査内容1)～8)について埼玉県および隣接地にある社会福祉法人の保育園、学校法人、公立の幼稚園、公立小学校に勤務している管理職の方および先生方5人にインタビュー形式で回答いただいたが、調査内容のアンダーラインを引いた重要キーセンテンスを中心に考察していく。

1) 保幼小連携の必要性を感じますか。

- ・保育士の立場から必要だ（以上、保育士Aインタビューより）
- ・小学校教諭の立場から必要だ（以上、教員Bインタビューより）
- ・小学校へ園児を送り出す立場として連携の必要性を強く感じる。（以上、園長Cインタビューより）
- ・小学校として園児を各園から受け入れる立場として連携の必要性を強く感じる。（以上、校長Dインタビューより）
- ・県教育委員会から委託を受けた研究校であるの



で当然、連携の必要性を感じます。（以上、校長Eインタビューより）

保育園や幼稚園を修了し、小学校に入学した子どもたちが、小学校生活へ不適應を起こすことなく、スムーズな生活が送れるよう連携を強めることは、子どもの発達や学びの連続性を保障する上でも保育士Aから校長Eまで5人全員の願いである。

2) その理由を教えてください。

- ・発達が遅れている子、家庭に問題がある子等については、事前に知ってもらう必要がある（以上、保育士Aインタビューより）
- ・子どもが誕生した瞬間から教育・保育は始まっているのです。その部分を見落としがちになるのは、幼児教育の現状が理解できていないからです。そういう意味でも連携は必要です。（以上、教員Bインタビューより）
- ・保育園・幼稚園から大学・大学院までの教育はつながっているのだから連携は必要。（以上、園長Cインタビューより）
- ・保育園・幼稚園と小学校では、かなり違った教育をしている。（以上、校長Dインタビューより）
- ・市立の小学校と幼稚園が同一敷地内に併設されており、人事面でも、小学校の校長が幼稚園の園長を兼務しています。また、ほとんどの小学校の教頭は、幼稚園の副園長を兼務しています。小学校と幼稚園の距離は、徒歩で2、3分ですので非常に連携がとりやすい環境である。（以上、校長Eインタビューより）

人間は誕生した瞬間から教育・保育が始まっていると考えると、生涯学習を含め、それぞれの接続期に子どもたちがスムーズな移行ができるよう、教育課程等の位置づけを含めた接続プログラムの作成は、必要なことであり、それを実現させるには、送り出す側と受け入れる側の相互の理解と協力体制が求められる。

3) 保幼小連携について、実際に取り組まれていますか。

- ・取り組んでいます。（以上、保育士Aインタビューより）
- ・取り組んでいます。（以上、教員Bインタビューより）
- ・さらに積極的な取り組みが必要。（以上、園長Cインタビューより）
- ・同感です。（以上、校長Dインタビューより）
- ・「学びや育ちをつなげる保幼小の連携」の研究に取り組んできました。（以上、校長Eインタビューより）

保育士Aから校長Eまで5人の方がそれぞれの勤務先で保幼小連携について取り組まれているが、地域によって連携に対する意識やシステムの上でかなりの温度差がある。

4) 具体的な取り組みの内容について教えてください。

- ・小学校を訪問し一緒に授業に参加したり、図書館で本を読ませてもらったりしました。（以上、保育士Aインタビューより）
- ・幼稚園児が小学校で給食を一緒に食べたり、公開授業に参加したり、ゲームを一緒に行ったり。（以上、教員Bインタビューより）
- ・障がいをもっていたり、気になる問題行動をしてしまう子は、10月～12月くらいの時期に小学校側から担当教諭の方に来園していただいております。毎年2名の方にお越しいただき、実際園児の活動を1時間以上参観していただきます。その折、保護者も来園していただいておりますので、最後にその子の家庭生活の様子について三者（幼稚園・小学校・保護者）で打ち合わせをします。（以上、園長Cインタビューより）
- ・学区内での公立の小・中・高の連携への取り組みは、始まっている。（中略）最近、幼稚園にもお声かけし、新たな連携がはじまろうとしている。（以上、校長Dインタビューより）

- ・幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続をはかるために、接続期の設定をしました。(中略) 接続前期 (中略) 接続中期 (中略) 接続後期と3分割しました。(中略) アプローチカリキュラム (中略) スタートカリキュラムが整備されました。(以上、校長Eインタビューより)

保育士Aから校長Eまで5人の各勤務先でも保幼小の三者間において、幼児と児童が豊かにかかわり合う中で、学び合い、育ち合う交流を目指しているが具体的な取り組み内容については、かなりの差が出たといえる。教職員相互の理解を深め、交流の意義や課題を明確にしていけないと効果的な連携にはつながらないのである。

5) 保幼小連携において、よいと感じることは、何ですか。

- ・園児が(中略)小学校への憧れや期待をもったりできる。(以上、保育士Aインタビューより)
- ・事前に子どもの様子を教えてもらえることは、迎える側の準備ができるという点で助かります。(以上、教員Bインタビューより)
- ・年間行事で(中略)校長先生をご招待したり、逆に小学校の運動会等に参列させていただいている。(以上、園長Cインタビューより)
- ・給食指導をはじめ、障がいの内容、気になる行動を起こす子の家庭環境等、(中略)入学前に教員間で交流できることは、(中略)効果を発揮している。(以上、校長Dインタビューより)
- ・交流授業を企画・立案することで、人とかわる力を育てることができる。企画・立案は、幼稚園側から提案されたり、小学校側から提案されたり様々だが、私自身が校長・園長として企画・立案することもある。(以上、校長Eインタビューより)

インタビューを通して、保育士Aから校長Dまでの勤務先と校長Eの勤務先の保幼小連携の具体的な内容の違いに注目したい。校長Eの勤務先が県や市の教育研究指定校であるという理由も考え

られるが、トップの考え方一つで連携の内容について即断即決できるようで、決定されれば幼小の教職員が具体的な行動に移せるようである。

保育士Aから校長Dまでの勤務先については、それぞれのトップの考えをすりあわせるところから始めなければならず、互恵的な連携を実現するためには、かなりの時間を要することになりそうだ。

6) 保幼小連携において、大変だと思うことは、何ですか。

- ・連携が重要だといいいながら、お互いの教育・保育内容が理解できていないということが問題だ(以上、保育士Aインタビューより)
- ・小学校側からみても保育所、幼稚園の教育・保育内容がどこまで理解できているか疑問。(以上、教員Bインタビューより)
- ・なめらかな連携を試みたいのに、小学一年生になったら赤ちゃん扱いになる。しかし求められることは、テストで何点をとれるかというハードルが設けられ、すぐに結果を出せない子どもも出てくる。(以上、園長Cインタビューより)
- ・昔は、放課後に小学校の先生は子どもと一緒に遊べた。今は、放課後、研修・会議・不審者対応・集団下校の指導等でほとんど子どもと遊び時間がとれない。(以上、校長Dインタビューより)
- ・連携するために打ち合わせ会議を設定することがかなり難しいです。(以上、校長Eインタビューより)

校長Eの発言に注目すると、これだけ連携のための環境が整っている勤務校でさえ、幼小の学校の特性・時間帯の違いから、教職員同士の打ち合わせ会議を設定するのが難しく、ほとんど企画内容は、管理職の方で検討されているようだ。よって、保育士Aから校長Dの勤務先になると連携についてさらにきびしい状況が予想される。

7) 保幼小連携については、いつ、どこで、誰が  
決めているのですか。

- ・園長が決めます。いつ、どこで決まるかについては、ほとんどの先生方はわからない。(以上、保育士Aインタビューより)
- ・校長が決めます。小学校へ入学してくる幼稚園・保育園の園長・所長と相談の上、決める。(以上、教員Bインタビューより)
- ・子どもを送り出す側の幼稚園・保育園の園長と受け入れ側の小学校の校長との間で(中略)決められる。(以上、校長Dインタビューより)
- ・その通りです。(以上、園長Cインタビューより)
- ・小学校の校長会で保幼小連携の必要性についての伝達はある(中略)校長が教頭と相談しながら決定します。(中略)入学してくる幼稚園、保育園の各園長とも連絡を取り合って連携のための具体的計画を立案していきます。(以上、校長Eインタビューより)

保幼小の連携が、いつ、どこで、誰によって決まるかについて管理職は理解しているが、現場の先生方まで理解が浸透していくかについては疑問が残った。

8) 保幼小連携を今後発展させるために必要な条件は、何ですか。

- ・どうしても管理職の理解が必要になります。(以上、保育士Aインタビューより)
- ・問題行動を起こす児童がクラスで4人以上いる場合は、(中略)副担任制を導入している小学校もあるようです。(以上、教員Bインタビューより)
- ・私立幼稚園園長の考え方と公立小学校校長の考え方が一致していかなければ連携を推進させることはできない。(以上、園長Cインタビューより)
- ・県内のK市では、市立のほとんどの小学校と幼稚園が隣接しており、人事面でも校長が園長を兼務している。(中略)保幼小連携について県

内でもトップレベルの成果をあげている地域である。(以上、校長Dインタビューより)

- ・小学校の校長、幼稚園の園長の連携に対する理解の深さと決断力だと考えます。(以上、校長Eインタビューより)

実は校長Eの勤務先は、校長Dが指摘した県内のK市にあり、その中でも県と市から教育研究指定校として委嘱された小学校である。その小学校の校長であり、隣接する幼稚園の園長も兼務している校長Eの保幼小連携に対する発言は重いものがある。現場の教職員も連携を発展させるためには、トップ同士の理解の深さが必要であると述べている。幼稚園教育は、学校教育のはじまりとして、生きる力の基礎を育成するという重要な役割を担っている。また、学校教育の基盤を培うという点で、保育所の役割も同様に重要だ。このような、義務教育以降の教育の基盤を培う役割をしっかりと果たしていくための保幼小連携が今、幼児教育に携わる組織のトップに求められている。まずは、そこでの理解を深めることが保幼小連携を成功に導くための重要課題となっていることが明らかになってきた。

## 5 おわりに

今回の研究では、埼玉県および隣接地にある社会福祉法人の保育園、学校法人の幼稚園、公立小学校に勤務している管理職の方および先生方5名を対象とし、インタビューを実施させていただいた。その際、校長と園長を兼任している校長Eからは、保育園、小学校、幼稚園の現場が一丸となり、画期的な保幼小連携の取り組みが行われている様子と子ども達への影響についての話を伺うことができた。また、校長・園長を兼任していることで、連携がしやすいことや教員達が一丸となって取り組むことの必要性和保護者や地域との協力の大切さについても伺うことができた。

その後、校長と園長を兼務しているE校長の学校で、市の教育委員会・教育研究会委嘱の研究

発表会が開かれ、実際に公開授業を参観させていただいた。その中では、1年生と幼児との関わりが「学校ごっこ」、「学校紹介」を通して行われていた。また、2年生と幼児との関わりでは、2年生が作った動くおもちゃで、おもちゃフェスティバルが行われていた。教員は、もちろん、保護者の協力もあり、保幼小の連携が行われていた。この画期的な取り組みに対し、日本各地の学校から、校長や教員が参加していた。保幼小連携の際の子ども達の表情は、とてもいきいきとしていて、児童が幼児に優しく、一生懸命に教えている姿や児童の発表の様子を憧れの表情で眺める幼児の姿も見られた。公開授業後の子ども達の発表からは、幼児が「喜んでくれたことを嬉しく思った」という意見や、児童が幼児に対し「優しくしてくれて嬉しかった」などお互いに満足そうな様子がみられていた。公開授業後の研究発表会では、校長先生を筆頭に、教員たちが協力し、より高いレベルの環境で子どもたちを育てていこうという研究熱心な発表が行われていた。その中では、「生きる力」「かかわる力」「学ぶ力」の3点をポイントとして、連携が行われていることが述べられていた。

最後の講演では、某私立大学の教授からこの研究発表会についての評価として、「ここまで画期的に行われている連携は、初めてである」ことや、「ここまでの取り組みができるのは、トップである校長先生の人柄と熱意」があげられていた。また、保幼小連携の今後への提言として①教員間の連携、②連携の意義の共有（互惠性）、③効率的な連携策を（考える）、④（保幼小連携を）学校（園）経営の柱に（する）、⑤教育委員会との連携・支援の5つがあげられていた。

2009年ベネッセ次世代育成研究所の調査<sup>5)</sup>によれば、「園児・児童の交流の有無と内容」として、「国公立の84.5%私立の58.4%が小学生との交流活動をしたことがある」、「全般的に国公立のほうが私立よりも小学生との交流活動が多いのは、設置母体となる自治体が活動を促進していることも背景にある」、「小学校との交流活動」については、『園児が小学生と一緒に活動する交流が最も

多く、国公立（345校）中84.3%、私立（721校）中70.3%、交流活動をしたことがある園に、園児と小学校とのかかわりはどのようなものであったかを聞いたところ、最も多かったのは「園児が小学生と一緒に活動』であり、『園児が小学生と一緒に活動を通して、お兄さん・お姉さんにあこがれをもち、入学を心待ちにできるような機会をつくる』ことが望まれている』と述べられている。また、「教員間の交流有無と内容」については、「教員間の交流は、国公立の66.6%、私立の26.7%が交流している」という結果となり、具体的な交流の内容を聞いたところ、「情報交換する場を持つ」との回答が国公立で81.3%、私立で81.9%と最も多いとの報告がされている。子ども一人ひとりの発達の状況や課題について、幼稚園から小学校に伝えたり、保育や指導の目的や内容を情報交換したりするなど、教員同士が互いの理解を深める努力をしている様子がわかる。

2012年、一般社団法人の日本保育学会「保育学研究」<sup>6)</sup>の中でも、「幼保小連携は着実に広がってきている」と述べられているように、連携の推進により、報告も数多くされ、情報共有のため、文部科学省他からも事例集が作成されている。その取り組みの内容から、地域差や人数差によってのむずかしさもうかがうことができる。

地域差、人数差によって違いが出てしまうことなく、すべての子どもにより高いレベルの環境を提供できるよう、また、質の高い支援をしていくためには、今後どのようなシステムや協力が必要なのか。今の時点で質の高い連携ができてきている隣接校などは、より高いレベルを求め、進んでいくことが今後の課題となる。

## 引用文献

- 1) 湯川嘉津美「幼稚園と小学校の連携・接続をめぐる歴史的考察」2010（文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査協力者会議（第4回）」にて報告）pp.1-4
- 2) 児嶋雅典「幼稚園・保育園と小学校のつながり



- り」日本保育学会会報, No.137, 2007 年 1 月, pp.1-15
- 3) 文部科学省「平成 22 年度幼児教育実態調査」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/05/31/1278591\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/05/31/1278591_02_1.pdf) (情報取得 2012/12/16)
- 4) 岩立京子「幼保小連携の課題と今後の方向性」日本保育学会「保育学研究」, 2012 年, p.82
- 5) 「幼小連携の現状と課題」ベネッセ次世代育成研究所「これからの幼児教育を考える 2009 春号」, 2009 年, p.6
- 6) 岩立京子「幼保小連携の課題と今後の方向性」日本保育学会「保育学研究」, 2012 年, p.82
- 子どもの貧困白書編集委員会編『子どもの貧困白書』明石書店, 2009
- 文部科学省「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」, 2005
- 文部科学省『幼稚園教育要領』教育出版, 2008
- お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校『子どもの学幼稚園・小学校の教師が作った接続期』東洋館出版社, 2006

(埼玉東萌短期大学 教授 正司顯好)  
(埼玉東萌短期大学 講師 前徳明子)

#### 参考文献

- 武藤隆・安見克夫・和田信行・倉掛秀人他『今すぐできる幼・保・小連携ハンドブック』, 2009, 10
- 文部科学省・厚生労働省『保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集』, 2009
- 永田繁雄「小学校から見る幼稚園教育との段差を生かした接続の視点」『幼稚園じほう 3 月号』, 2003
- 時事通信社編『内外教育』, 2002.10
- 秋田喜代美監修『幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例』小学館, 2002
- 秋田喜代美・東京都中央区立有馬幼稚園・小学校「幼小連携実践事例」小学館, 2002
- 国立教育政策研究所・教育課程研究センター『幼児から児童期への教育』, 2005, 2 月
- 藤江康彦「幼小連携の話し合い教師の学習」秋田喜代美、キャサリン・ルイス編著『授業の研究 教師の学習』明石書店, 2008
- 藤井穂高「幼小連携論の動向と課題」『教育制度学研究』第 13 号, 2006, pp.192-195.
- 子ども発達教育研究センター編『幼児教育と小学校教育をつなぐ—幼小連携の現状と課題』, 2005